

小学生を対象とした未来型教育（ESD：持続発展教育）の必要性について

北村祐一* 菊池 剛** 森脇千春**

About the necessity for the future type education(ESD:Education for Sustainable Development)for a schoolchild

Yuichi KITAMURA*Takeshi KIKUCHI**and Chiharu MORIWAKI**

Abstract

In recent years, the word `biodiversity` has been heard more often. Although there is admiration which serves as general language compared with before, why is it that the importance has come to be cried for and reported?

Key words: Biodiversity, ESD (Education for Sustainable Development), schoolchild

キーワード: 生物多様性, ESD, 小学生

1. はじめに

近年、「生物多様性」という言葉を耳にすることが多くなってきた。その重要性が叫ばれ、報道されるようになってきた。それは、地球上のいたるところで自然破壊の進行や、化学物質による水や大気汚染、温暖化による環境の変化により、多くの生物種が急速に失われつつあるからと考えられる。その生態系を壊さないように暮らしていく知恵をもう一度取り戻し、多様な人々と協力して、地域づくりに取り組んでいくことが重要である。このプロセスこそがESD(持続発展教育)であり、ESDの知見を生物多様性に生かしたいと考えている。

2. ESDの理念を学校教育に活かすには

ESD学習の理念を学校教育に活かすには、教育実践目標を明確にすることによってこそ効果的に実践できる。ESD学習の大きな特色は、未来型指向性、関係性、多様性、変化への対応力、推察・イメージ力、響感力である。

未来型指向性とは、子どもたちに、自分たちの考え方や言動が未来をつくることに繋がっていることを認識させ、持続可能で希望ある未来の担い手を育てることが重要である。

関係性とは、大気や水、大地や海、森林に生息するさまざまな動植物との有機的な関連により、多様なものとの関わりを認識し、多様な他者や自然界と調和していくための資質や能力、技能を高めていくことを目標としている。

多様性とは、多様なものとの出会いが対立や混乱を生起させるが、そこにこそ発展の要因があると考えられることがESDの基調である。子供たちに多様なものを認め、尊重する姿勢を持たせ、異なることの出会いこそが新たな知見を生み出し、発展への要因になることを体得させることが大切である。

変化への対応力とは、予測のつかない事態が起こる時代であるからこそ臨機応変の対応力が子供たちにとって必要である。また未知なもの、自分とは異なる生き方や見解に知的好奇心を持ち、それらを吸収し、自己を変革・成長させていく柔軟な姿勢を持つことは、大切である。臨機応変の対応力、また自己を変革していく力の育成は、ESDの目指す目標である。

推察・イメージ力・響感力とは、相手の立場や文化的背景などを想像する力が、相互理解を促進し、信頼感を育てることと考えられる。また、相手の心情に響感する感性を持つことができる。推察・イメージ力・響感力を育むことは、ESD促進の基盤形成は大変重要であると推測される。

3. 学校でESDを推進するためには

学習方法の改革では、ESDの目指す資質や能力、技能を持った人間を育成するためには、学習のあり方そのものを改革する必要がある。それらの要点をあげると、①多様な人々や事象、自然との出会いの場面を設定することや自分と地域のつながりを実感させること②学習による自己成長を自覚させること③

外部講師、地域の施設など多様な教育資源を活用、調査結果を分析し、提言をまとめまた自ら実行していく体験をさせる。また、多様な人々との出会いや仲間との協議学習を重視するESDにおいて、コミュニケーション能力は重要であり、「聴く・話す・対話する」技能を日常的に高めておく必要がある。

また、人間の行動のエネルギーは、本来、衝動→興味→価値（理念）へと展開される。換言すれば、五感で感得したことがおもしろさとなりやがて、知ろう、考えようとする意欲に繋がっていく。実感が持てる学習を展開させていくには、現場性と身体性を意図的に取り込むことが効果的である。

4. 教育者がESDを推進する役割

教師がESDを推進するには、基本姿勢として、多様な意見や考え方、感覚などむしろ活かす、開かれた認識・価値形成への意識を持つことが求められる。支援・救助者としての役割とは、子どもたちが多様な他者とともに、さまざまな発見をし、他者と良好な関係を構築できるように支援・援助する。

共創者としての役割とは、仲間とともに、得意分野でそれぞれの個性を生かしつつ、協力し合う姿勢を持つことである。こうした教師の共創によってこそ、多様な人々と共生できる。人間の育成のための学習が創造できるのである。

学習者としての役割とは、目の前の子どもたちの成長を求めるために、現代社会の課題について、さらに児童理解、教材開発や学習方法などについて、教師が学び、研究することが明日の教育を導いていくのである。

先導者としての教師の役割とは、教師が学習のさまざまな段階で助言・コメント等を行うことにより、子どもたちは自分の発言・発想の価値を自覚したり、視点を変えたり、思想を深めたりする発見を得ることにもなる。教師には、子どもたちを高みに導く先導者としての役割があると考えられる。

ESDでは、多様な他者との関わり希望ある未来の構築に向けて協働作業や対話をしている。こうした学習活動を通して、子どもたちは、学ぶ楽しみを実感し、「学ぶ」とは世界が変わること、自我が変わること、自己成長を自覚するのである。そこに学ぶことの楽しさが生まれれば、ESDの学習で、子どもたちは、世界の現実を知り、多様な文化や価値観の存在に気づき感じ合うものがあると思われる。

学びに不可欠なのは、自己の内面にある思い、発想、感想を表現すること、そして友だちとの協働学習を行う事により子どもたちは、学習の過程で、子どもたちは、自己の潜在能力を伸長させ、仲間とともに学ぶ喜びを心の底から実感していく。

こうした学びを創り出すことは、実は、教師自身も成長させると考えられる。「教える」とは「ともに育つ」こと、こどもたちの世界を広げたいと願い、教材を吟味し、学習プロセスを工夫する、実際の授業では、子どもたちの反応をできる限り活かす配慮をする。こ

の努力の継続は、教師自身の実践力を高め、また人間としての心の広さや豊かさをもたらし、授業者として、人間として成長していくことにつながると考えられる。

5. ESDを実践するポイント

現実的な課題を挙げると、世界中で、持続不可能と思えるさまざまな問題が起こっている。その問題が非常に深刻で解決する必要性が強いことから生まれたのが、ESDである。ESDの学習プランを練る上で、実際に身の回りや地球規模で起こっている。

現実的な問題を学習テーマに据えることが、とても大切になってきている。

また、現実には起こっているさまざまな問題を子どもたちに伝え、子どもたちに地球や世界の未来を希望あるものにできる資質・能力を培わせていくことが、教育の重要な使命であると考えられる。

ESDを始めるには、地域を題材にした地域に根ざした学習を題材にし、地域が考えている現実的な問題は、ESDの学習テーマとして最適である。

地域の問題は、グローバルな問題の縮図であることが多いからである。ESDとして地域の問題を扱えば、その問題や事象に対して、子どもたちがくり返し関わることができ、子どもたちが問題を見つけたり、再度問題を確かめたりできるという利点がある。地域の問題に目を向けることで、単に資料を活用するだけの学習から体験のよさを活かす学習へと、大きく可能性も広がっていくと考えられる。

環境教育では、`Think Globally, Act Locally` という言葉が有名である。この言葉は、1972年の国連人間環境会議に向けて書かれたウォードとデュボスによる`Only One Earth`（邦訳「かけがえのない地球」）から使われるようになった。

`Think Globally, Act Locally`とは、「地球規模で考えてからこそ、足元から行動する」という意味である。

子どもたちの力で、いきなり世界を変えることは不可能である。だからこそ、視点は、地球規模で広く持ちながら実際には、身近なところ、自分たちでできるところから地道に行動し、改善していくことが大切になってくると考える。さらに地域を題材にすることによって、子どもたちが、問題を解決するために行動に移すことも容易になる。

地域には、価値ある教育資源がたくさんあり、それは、資料館や、博物館などの施設から、専門的な知識や経験を持っている人的資源までさまざまである。探してみると、授業に約立てることのできる潜在的な教育資源がたくさんある。このような教育資源を上手に活用することができれば、ESD学習がとてもやりやすくなると考えられる。ESD学習に活用することのできる教育資源を探すことは、教育者の大きな役割の一つと言える。

6. 参加型・問題解決型の授業の展開

十分な準備と計画のもとにESD学習を実施してもESDで望まれている資質や能力を身につけるのは容易なことではないと考える。重要なのは、日常から子どもたちが主体的に活動する学習を展開していることだと考える。

ESDで望まれる資質や能力は、ある特定の教科書や領域だけで育てられるものではなく、ふだんの学級運営や授業の中でこそ培われる。教育者は、ふだんの学習の中で、子どもの主体的・参加型の学習を意識し、ESDの理念を持った実践を行い、ESDで育てたいと思う価値観を培っていく必要がある。それには、日ごろから学級の中で公平・公正の大切さや仲間と協調したり、互いを尊重し合ったりすることの重要性について指導し、そういった態度を育てておく必要があると考える。そして、学級の中でどの子どもも自分の感じたことや考えたことを自由に発言できる解放性や仲間の発言を響感的かつ寛容に受け止めてくれる雰囲気や育てておくことよよいと推察する。また、授業を展開する際に、教育者は、子どもの言葉で授業をまとめ、子どもに授業を創り上げる学習をすることが重要である。そして得た結論は、子どもたちが、主体的に学び、子どもたちが自分自身の力で授業を創造していくような参加型の学習、言葉を変えるなら、子どもたちが、自ら何かをつかみ取っていくような学習を実施しなければ、子どもたちの価値観や行動力を変えることはできないと考える。問題型の学習展開では、子どもが主体的に活動する前提として、教育者が、時間と活動の見通しを示すことが挙げられる。

子どもが調べる活動として何時間使うことができるのか、必要な資料や情報をいつまでに用意する必要があるのか、この2つを考えることが大切である。また学習の最終段階で、どんな形でまとめをするのかを示すことによって、子どもにとって目的意識が持ちやすくなる。たとえば、調べてわかったことをもとにパネルディスカッションを行うとか、模造紙にまとめて、ポスターセッションで発表するとか、最終段階での活動が具体的に見通せると、それに合わせて子どもたちは計画的に学習を進めることができる。問題解決の過程では、個人が調べを持った内容に関して、個人で問題解決することだと考える。教育者は、この個人の問題を尊重し、精一杯その解決のために支援を行う。しかし、ESDのテーマを学ぶ以上、個人での問題解決には限界がある。その限界を打破するために、個人と集団との関わりを大切に、互いの問題解決活動を認め合い、高め合うような協議働の場面がなくてはならない。特に問題を設定したり解決方法を見出したりする場面では、一人ひとりの考えを練り上げることが必要である。具体的には、KJ法的な活動を行うことを考える。短冊に子どもたち一人ひとりが自分の考えを書いて、黒板に掲示し掲示されたものを子どもたちみんなで分類・整理することで、興味の方向性や子どもたちの問題が明確に

なってくる。そして、問題解決の場合は、自分たちの手で問題を解決し、未来を創造していこうという視点があってこそESDの学習である。

この視点が欠けた問題解決では、ESDとして十分に機能したとは言えない。問題を解決して、どんな地域にしたいのか、地球や世界をどのように改善していきたいのか、今ある自然をどのように守っていききたいのか、世界の国々とどのような関係を築いていきたいのか、などといった視点が必要であり、つねに問題解決の過程の中で、このような未来型指向性を育てていくことが大切である。

ESDで扱うようなテーマは、正解が一つではない。実際には、実生活の中で出合うさまざまな問題も、正解が一つではないものがほとんどで、私たちは、いろいろな要素を総合的に検討して、解決策を見いだしている。また関係者と話し合う中で、互いの考えを広げ深め、合意形成して結論を出すことがほとんどである。そういった実生活、実社会での問題解決と同じプロセスがESDの中にも必要になっている。

7. 考察

いまだ形成途上にあるESDにおいて、私たちが今なすべきことは、まさに「共にある」という共生の理念の実現であるように考える。

圧倒的な多様性ととまどい自分の立ち位置を気にかける前に、身近なところで、真摯に教育に取り組む人々と共にあるための一歩を踏み出すことが出来るはずである。

ESDが、何が何かわからないという人でさえ、子どもたちの未来のために、持続可能な社会の実現のために、労を惜しまず日々子どもたちと向き合っている人は、たくさんいると考える。

このようなESD活動は、学級や学年の枠を越え、学校全体や保護者、地域などを巻き込んでいくものであり、実施するには多くの壁がある。ESD活動を実施する際には、学校全体や保護者、地域などと上手に連携を取りながらその壁を取り除き、ESD活動を推進していくことが、教育者の大きな役割になってくると考える。たとえ合意や一致が得られないとしても、共にあることで、支え合い学び合うことはできると思われる。

自分達の小さな枠の中にとどまらず外の領域の仲間たちとのつながりを求めて行動を起こすことこそが、ESDの未来を担う私たちの課題だと考える。

そして、子どもの思いや願いが実現できるような、子どもが学校づくり、まちづくりに参画できるような授業実践も増えている。学校がそういった活動を支援する一方で、行政や企業に対しては、こういった子どもたちの活動を受け入れる体制を整えて頂くことを要望する。

参考文献

- 【1】未来をつくる教育ESDのすすめ
ー持続可能な未来を構築するためにー
多田考志、手島利夫・石田好弘
(株)日本標準
- 【2】わかるESDテキストブック3
生物多様性を大切にしたい地域づくりをはじめよう
「NPO法人 持続可能なための教育10年推進会
議」
みくに出版社